

一般大学生に子どもの発達について講義することの意義

成田 朋子

I はじめに

この世に生を受けた子どもすべてが健やかに成長することを願わない大人はいないはずである。しかしながら、果たしてすべての子どもは健やかに成長しているのだろうか。1980年代に入って以降、乳児死亡率の低さは世界で1、2位⁽¹⁾を誇るわが国であるが、虐待、いじめ等々の問題は一向に減少せず、子どもすべてが尊重されているとは言いがたいのが現状である。子どもの存在そのものを大切に思い、子育ての大切さにも思いを馳せることのできる世の中であってほしいものである。まわりにいる大人たちが幼い者を慈しみ、かわりを持つ中で子どもは成長し大人になり、次の世代を慈しみ育てる、という子育ての伝承は、かつては、いわゆる普通の生活の中で循環していたが、家庭の教育力、地域の教育力が低下してしまっている今日では、どこかで意図的に学習しなければならないようになってきているのかもしれない。大学生に対して子どもの発達や子育てを学習させる試みから、その可能性を探ってみたい。

II 子どもの現状と社会全体が子どものことを学ぶ必要性について

本年敬老の日の新聞⁽²⁾は、「女性の4人に1人65歳以上」という見出しの下、ますます高齢化が進行していることを報じていた。その対極にある子どもについては、1990(平成2)年の1.57ショック以来、合計特殊出生率でみると、ここ1、2年数値は微増傾向にあるものの、少子化にほとんど歯止めがかからない状態が続いていると言わざるを得ない⁽³⁾。したがってこれらの状況からみて、日本社会の少子化・高齢化は世界でもかつて経験したことがないほどの早いスピードで進行している⁽⁴⁾と考えられる。

このように今後も進行すると思われる少子化の中で、次代を担う子どもの教育にはますます関心が向けられることになると考えられるが、幼児教育の振興は今や世界的な潮流であり、わが国にお

いても、他の国と同様、幼児期への関心が向けられてきている。2006(平成18)年に改正された教育基本法では、「幼児期の教育」に関する条文が新設され、幼児期の教育の重要性が改めて協調されている。また、2007(平成19)年改正の学校教育法でも、学校の範囲を規定した条文が、「この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、大学、高等専門学校、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園とする。」から「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び専門学校とする。」と改められ、幼稚園が小学校以降の学校教育の始まりとして、小学校以上の教育の基礎としての位置づけがなされている。

さらに、これに先立つ2005(平成17)年の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」⁽⁵⁾は、幼児教育は生涯にわたる人間形成の基礎を育む、つまり、学校教育のはじまりとして「生きる力」の基礎を育成する役割を担うという幼児教育の重要性を確認した上で、今日的課題として、「近年の子どもの育ちが何かおかしい」ことを指摘している。

答申は、今日の子どもの育ちの変化として、基本的な生活習慣の欠如、コミュニケーション能力の不足、運動能力の低下、自制心や規範意識の不足等をあげ、その背景として、少子化、核家族化、都市化、情報化等の経済社会の急激な変化、人間関係の希薄化、地域社会における地縁的なつながりの希薄化、大人優先の社会風潮などに伴う、地域社会の教育力の低下と家庭の教育力の低下をあげている。

そして今後の幼児教育の方向性として、家庭・地域社会・幼稚園等施設の三者による総合的な幼児教育の推進、幼児の生活の連続性及び発達や学びの連続性を踏まえた幼児教育の充実をあげている。

このような流れの中で、中央教育審議会答申を

受けて、2008（平成20）年、幼稚園教育要領・保育所保育指針が改訂（改定）された。

幼稚園教育要領は、その改訂の基本方針として、①発達や学びの連続性を踏まえた幼稚園教育の充実、②幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実、③子育て支援と預かり保育の充実、という3つの方向性を重視して改訂された⁽⁶⁾。

一方、「健やかな子どもの育ち」を支えるために「豊かな人間性の育成」を目標とする保育所保育指針も、通知から告示へと大きく変えられることになり、保育所保育が社会から期待される役割として、子どもを健やかに育てること、子どもを育てる親（保護者）を支援すること、の2つが総則に明記されることになった⁽⁷⁾。

このように、幼児期の保育・教育については今日様々な改正や改訂が行われているのであるが、そもそもわが国において、子どもの問題に対しての関心は何時ころから起こってきたのであろうか。

このことに関しては以前拙稿⁽⁸⁾で述べた通りであり、1970年代後半にはすでに、遊べない子ども、無気力な子ども、生活リズムの乱れた子どもの増加が指摘され、子どもの育ちに警鐘が鳴らされていたのである。子どもの好ましくない状況はその後も続き、80年代中頃を過ぎるころからは「普通の子」が問題を起こすと言われるようになった。そしてこれら子どもの状況と平行して、子どもの問題だけでなく、子どもの親の側の問題も指摘され始め、特に育児に不安を抱く母親がクローズアップされるようになり、「育児不安」という言葉が生まれたのである。

1990年代に入ると、このような子どもを取り巻く社会背景に対して、政府は社会全体で子育てをしていくという考えの下、様々な施策を展開させることになった。エンゼルプランとそれに続く緊急保育対策5カ年事業、新エンゼルプラン、次世代育成支援対策法、子ども・子育て応援プラン、等々である。このエンゼルプラン策定以降、「子育て支援」という言葉がクローズアップされることとなり、次世代育成支援対策法を契機に、これからの児童福祉の中心課題は子育て支援であり、それも、直接的な子育て支援そのものに極限する

のではなく、男性や企業も含めて、社会全体で支えあう体制の整備が必要であるという認識が社会に根付き始めたと言える。

したがって、これからの児童福祉の問題は、子育てを社会全体で支えあう体制をいかに整備するかであると考えられよう。

今日、企業や行政では数値目標を掲げた取り組みが行われ、地域でも様々な試みが行われるようになった。その一つとして、世代間交流の意義が唱えられ、保育所および幼稚園児と中学生・高校生、園児・小学校児童と地域の高齢者間のふれあいの機会が持たれるようになった。さらには次世代を育成する観点から、中学生と大人たちが出会う機会が少ないことも指摘され始め、中学生と大人たちがふれあうための試みも始まっている。また、世代を超えて家庭の絆、子育てについて考えようという講座も学習センター等で開設されるようになった。いずれも、すべての世代に、生きていくための力、養護性、次世代育成力を身につけてもらうための試みと言えよう。

これら世代間交流によって、確かに、お互いふれあう場面は増えたと考えられるが、果たしてお互いの理解は十分に進んだのであろうか。また、お互いを尊重する意識は芽生えたのであろうか。

一方では、複雑化する時代背景の中で、精神的に不安定な大人、不安定な子どもが増えているのではないだろうか。そして、さまざまな場面で「子どもが病んでいる」という言葉が聞かれるのである。

「子どもが病んでいる」というセンセーショナルな言葉が生み出され、すべての問題を「病んでいるから」という言葉で片付けようとする傾向も見られるが、子どもたちを責任を持って育まなければならない我々には、「病んでいる」という内容を吟味する必要があるのではないだろうか。現在を生きる子どもたちは本当に病んでいるのであろうか。もし病んでいるとするならば我々大人は何をなすべきであろうか。筆者はかつて、以上のような問題意識から、まず、近い将来子どもたちを保育・教育、さらに養育することになるであろう学生たちに子どもが病んでいるかどうかについてレポートを求めた。

学生たちのレポートは、彼らの多くは、現在の

子どもたちの状況は病んでいると言わざるを得ないが、子どもが病んでいるというよりは、まわりの環境、中でも親が病んでいて、子どもを追い込んでおり、親・大人・社会を変えていくことの必要性、社会全体が子どものことを学ぶことの必要性を感じていることを示していた。

そこで以下では、社会全体が子どものことを学ぶことの必要性について考えてみたい。

Ⅲ 大学生に子どもの発達について講義することの意義—学生へのアンケートから

筆者は現在A大学で非常勤講師として、特別講義a—胎生期・乳児期の発達と親子関係—(春学期)、特別講義b—幼児期の発達と親子関係—(秋学期)を担当している。

特別講義a(春学期)の授業概要、目的は「私たち人間は生まれてから後、様々な人々とかかわる中で人間らしい生活を営み、その中で性格を形成し、自己を確立し、人間らしく成長する。人生のスタートの段階である乳幼児期に、いかなる人間関係を体験したか、なかでもどのような親子関係の中で育まれたかが、長じて健全な社会生活を営めるかどうかの鍵になるのである。

ところで、親と子の関係は決して親から子どもへの一方的な関係ではなく、相互作用的な関係であり、親自身も子どもを育てることにより発達するという側面も見逃してはならない。さらにこの親と子の関係は、胎生期からすでに始まっていると言っても過言ではないだろう。

そこで、胎生期・乳児期の発達の様相と望ましい親子関係について概観し、さらに親子のかかわりの成立を阻む要因について、具体的事例を紹介しながら考察する。」ことである。

授業の内容・スケジュールは、子どもの発達、こどもを育てることの大切さへの理解・関心が少しでも深まるよう、14回の授業内容を以下のように設定した。

- 1 週 本特殊講義の目的と意義
- 2、3週 胎生期の発達と親子関係
- 4、5週 新生児の有能性と新生児期の母と子の相互作用
- 6、7週 乳幼児期の発達と親子のかかわり
- 8、9週 乳幼児期における愛着の形成

- 10、11週 育児不安と乳児虐待
- 12、13週 子どもの発達と親の発達
- 14 週 まとめ

以上のような半期授業の終了時、受講学生にアンケート調査を行った。

質問項目は

①あなたは子どもが好きですか。

- 1、好き
- 2、どちらかといえば好き
- 3、どちらかといえば嫌い
- 4、嫌い

②本講義の内容は関心が持てるものでしたか。

- 1、持てるものだった
- 2、どちらかといえば持てるものだった
- 3、どちらかといえば持てなかった
- 4、持てなかった

③本講義を受講して胎児、乳児について発見したことはありましたか。具体的に記述してください。

④本講義を受講して、子どもへの関心は強くなりましたか。

- 1、強くなった
- 2、どちらかといえば強くなった
- 3、どちらかといえば弱くなった
- 4、弱くなった

⑤授業の内容は、あなたのこれからのどのような活かされる(活かしたい)と思いますか。

であり、③、⑤については自由記述とした。

講義最終日に出席し、アンケートに記入した学生68名(男子12名、女子56名)分の主な結果は以下のとおりである。

(1) 質問①②④の結果

質問①②④の結果を表1に示す。

「子どもが好き」、「講義の内容に興味を持つことができた」、「子どもへの関心が強くなった」学生の割合は男子学生におけるより女子学生の割合の方がやや多い傾向にあることが分かる。

筆者は、子どもが好きな学生にはますます子どもに興味を持ってほしいと願い、また、たとえ今現在、子どもが苦手、嫌いであっても、講義を聞く中で少しでも子どもに興味・関心を持てるようになればと願いながら講義しており、大部分の学生の「子どもが好き。」「講義の内容に関心が持て

一般大学生に子どもの発達について講義することの意義

た。」「子どもへの関心が強くなった。」という回答は満足できるものである。

講義内容に興味を持てなかった学生（表中 a、b で示した学生）が「子どもへの関心が強くなった。」と回答していることも、授業の効果があつたと考えられる結果であろう。ただ1人の気がかりな学生（表中 c）は、子どもがあまり好きではな

く、講義内容に関心は持てるものであつたが、子どもへの関心がどちらかといえば弱くなった学生である。しかし当該学生の自由記述欄に「先生の熱心さという点で、授業にはやる気であつた。」と書いてあり、後々、授業内容を多少なりとも思い出し活かせる場面もあることを願うばかりである。

表1 質問①②④への回答（カッコ内の数字は男子学生数）

「子どもが好きですか」	「本講義の内容は関心が持てるものでしたか」	「子どもへの関心は強くなりましたか」				合計
		強くなった	どちらかといえば強くなった	どちらかといえば弱くなった	弱くなった	
好き	持てるものだった	26(8)	1(1)	0	0	
	どちらかといえば持てるものだった	5(2)	7(3)	0	0	12(5)
	どちらかといえば持てなかった	0	0	0	0	0
	持てなかった	0	0	0	0	0
どちらかといえば好き	持てるものだった	2	3(1)	0	0	5(1)
	どちらかといえば持てるものだった	2(1)	12(7)	0	0	14(8)
	どちらかといえば持てなかった	0	1 ^a (1)	0	0	1(1)
	持てなかった	0	1 ^b	0	0	1
どちらかといえば嫌い	持てるものだった	0	0	0	0	0
	どちらかといえば持てるものだった	0	6(1)	1 ^c	0	7(1)
	どちらかといえば持てなかった	0	0	0	0	0
	持てなかった	0	0	0	0	0
嫌い	持てるものだった	0	0	0	0	0
	どちらかといえば持てるものだった	0	1	0	0	1
	どちらかといえば持てなかった	0	0	0	0	0
	持てなかった	0	0	0	0	0
合計		35(11)	32(14)	1	0	68(25)

(2) 「受講して発見したこと」について

質問③に対する回答を表 2 に示す。

表 2 質問③⑤に対する自由記述

整理番号	性別(○印: 男子学生)	受講して発見したこと	今後どのように活かしたいか	その他感じたこと
1		新生児が大人の耳よりも正確に聞き分けられること。	授業を受けていて、いろんな場面で自分自身に置き換えてシミュレーションできた。自分に子どもができた時、この授業で習ったことや発見したことを思い出して、子育てしていきたい。	シラバスを見ておもしろそうだなと思ってとったが、授業を聞いているうちにもっと興味が湧いてきてとても楽しかった。赤ちゃんへの興味が高まったし、子どもができたら…と想像することが増えた。将来子どもを産んで育てることが楽しみになった。
2		生まれたばかりの乳児でもあらゆる能力を持っていること。親子関係や家庭環境の大切さがよくわかった。受講前から子どもに興味があったが、先生の話の聞いていると知らないことの方が多くて驚いた。	もし将来子どもができた時は、この授業で教わったことを頭に入れ、子どもの成長をしっかり観察し、しっかりと見守りながら大切に育てていきたい。	講義内容や先生の話方から、先生がとても子どもが好きなんだということが伝わってきて毎回心が温かくなった。私も先生のように、優しく温かい目で子どもを育てていきたい。
3		赤ちゃんに初めから備わっている能力にびっくりさせられた。	母親になった時、講義で学んだ乳児との関わり合いを実践したい。例えば、物の永続性が身についてきたなどと実感しながら育児すると楽しいだろうと思う。	生きるための力をもっている人間の赤ちゃんのすごさを知った。でもさらなる成長(精神的発達)には母親からの働きかけも必要不可欠であることを学び、改めて育児の奥深さを感じた。
4		沢山の発見があり、赤ちゃんは何も出来ないというイメージを覆された。	小さい頃から母親になりたいと思っていたが、この授業を聞いてますますその意識が強くなった。加えて、知識のある親、母親になりたい。すでに母親になった友達にも、その子たちが知らないような情報を教えてあげたい。	赤ちゃんにすごく触れたいくなった。母親の存在ってすごいんだなって改めて思い、ますます母親にあこがれを持った。
5		知らないことだらけだった。	子育ては思っている以上に大変であることを実感させられたので、将来親になるためにも、習ったことを忘れずに保管して、もっともっと勉強していきたい。	母にも子育てのやり方や、どのようにして私を育ててくれたのかも聞いてみようと思いました。大人になって、親を尊敬するというのは、こういうことかと思った。
6		子どもの全体的発達。	5歳の姪と3歳の甥に活かしたい。成長していく2人を見守りたい。姉の負担を軽くしたい。	楽しい講義だったので、また受けたい。
7	○	乳児期の母子関係が希薄だと精神発達が遅れること。	将来親になった時思い出したい。友人に授業の内容を教えてあげたい。	
8		親とのコミュニケーションの大切さ。	発達心理に興味を持ったので、自分でもさらに勉強したい。親になったら、接し方等実践できたらいいと思う。	

一般大学生に子どもの発達について講義することの意義

9		アタッチメントの重要性。 母親と子どもの相互作用はたくさんあるということ。	授業内容は子育てしていくうえで大切なことばかりだったので、子どもを産んだ時知識を活かしたい。	
10		子どもと遊ぶ機会があるが、自然に使っていた言葉がマザリーズであること。それが子どもとの距離を確実に縮めるものだという事。	子どもを育てる立場になった時、愛情をもって接することを大切にしていきたい。	
11		成長のスピード。 子どもが親をよく見ていること。	コミュニケーションのとり方、接し方を自分の子育てに活かしたい。 知らないことだらけなので、いろんなことを知り、自分の生活を今から変えたい。	
12		乳児死亡率の国による差。 胎児、乳幼児期が人間の発達にどれほど重要か。 人間形成には関係なく、みんな同じように育つと思っていたが、環境や態度により精神面の発達に影響すること。	親になった時活かせる。 発達障害があった場合の対応の仕方など。	
13		器官形成期の重要性。 胎内にいる時から母親の精神的なものに影響を受けてしまうこと。 原始反射。	将来もしも子どもができれば、絶対たくさん愛情を注ぎたい、子どもとの時間を大切にしたい。 この講義では子どもの成長だけでなく、同時に母親の精神的、身体的変化もよくわかったから、妊婦さんに接する時は気をつけたい。	親が愛情いっぱい育ててくれたから、今自分がこうしていられることがわかったので、親の立場になったら同じようにしようと思う。
14	○		子どもと関わるボランティアをしているので。	
15		母親の存在の大切さ。 自閉的な子どもなど、十分な母性的養育を受けていても子どもに相互作用能力がかけていると愛着が育たないこと。	将来福祉系の仕事につきたいと思っていて、その時子どもと触れ合う時。 現在アルバイトで子どもと触れ合う時、個々に合うような接し方ができればと思う。	
16		胎児、乳児が思わぬ能力もっていること。 胎児、乳児、母親すべてが関係していること。	いつか子どもを持った時、関係性の意識を活かしたい。	
17		親の勝手な考えだけで育児を進めてはいけないこと。	自分の勝手な考えだけで育児しないようにしたい。	
18		胎児期から母親の心身の状態が影響してしまうこと。 話しかけることの大切さ。 母親の接し方によって成長が影響を受けること。	母親になった時、子どもがお腹にいる時から子どものことを考え、悪影響になることは避け、よりよく成長するために大切なことを念頭において育児をする。	
19		胎児、乳児の時の親とのかかわりが発育に影響を及ぼすこと。 原始反射が一度消失してグレードアップして現れること。 把握反射の力が強いこと。 ボウルビーの「両者が」が印象的であったし、納得がいった。	子どもをもった時、言葉を話せない間にも、優しく話しかけ、笑顔を返し、関心を持って育てたい。 お腹にいる時も愛し、十分発育できるようにしたい。	

20	○	胎児に音楽を聞かせても効果はないこと。	いとこの赤ちゃんに優しくしすぎて愛着の対象にならないよう気をつける。	
21	○	乳児が顔、声の識別をすること。	子どもをもった時 飲酒、タバコに気をつける。	
22	○	子育ての大変さ。	将来子どもをもった時、学んだことを頭において育児したい。母親任せにするのではなく、すすんで子どもと接していきたい。	子どもが好きなので受講したが、子どもを大切にしていきたいために受けてよかった。
23	○	親の愛情の大切さ。生きていくための機能を身につけていく様。	親になった時に活かせる 接し方を知ったので楽しく子育てができる。個性を認める。	胎児期、乳児期という早い時期からの親子の関わり方がその先の発達に大きな影響を持つことを学んだが、これは意外なほど知られていないことだと感じた。子育てをする母親のみならず、親子のかかわりの重要性を正しく理解し、子どもに愛情をもって接し、子どもの健全な発達を促すことが何よりも大切なのではないだろうか。
24		母親が外で働いていても子どもはちゃんと育つこと。夫婦関係も多くの影響を与えること。	実際は違うかもしれないが、学んだことを活かして子育てしていく。	
25	○	社会性の発達と母親のコミュニケーションが関係あること。	自分の子どもへの接し方、育て方に活かせる。	2週間の教育実習で、子どもの成長に喜びを感じるようになった。
26	○	母との関係が大切なことは知っていたが、同年代の子どもたちと関わることで相互作用が引き起こされることを知った。	親になった時に学んだことを活かす。母親まかせでなく、両方にしっかりと目を向け、かかわっていくようにしたい。	
27	○	マザリーズの男性と女性の効果の違い。	できれば将来子どもは育ててみたい、できれば2人以上。その場合、授業で愛情の大切さを感じたので、親として本当に子どもを大切に育てていくことができたらと思う。	私は4年生で、卒業までに何か将来的に役に立つ勉強ができたらと思って受講したが、正解だった。心理学としてではなく、子育てという人間の基本的な営みを考えると、大人になる前に、親になる前に誰しも受けておくべきではないかなと思った。
28		アタッチメントの大切さ。	将来子どもが生まれても仕事を続け、一緒にいる時間を大切に過ごしたい。	
29		喫煙、薬物の影響が初期で大。	自分に子どもができた時だけでなく、甥っ子や友人の子ども、近所の子どもと関わる時に活かしたい。死ぬまでに「子ども」というものは身近に存在するはずだから、ずっと活かしたらよいと思う。	
30	○			養護施設でボランティアをしていて、将来も施設で働きたいと思いい、楽しく受講できた。
31	○	大人にはできないサルの顔の区	将来きっと自分も親になること	

一般大学生に子どもの発達について講義することの意義

		別など、乳児が大人とは違った能力を持っているが、成長につれその能力が減少していくこと。	があると思うので、その時子どもにも良い反応ができるとよいと思う。 成長は親によって決まるので、知識をしっかり持って育てることができればよい。	
32		今まで胎児、乳児をひとまとめにして考えていたが、発達が早く、赤ちゃんという一区切りできない変化が毎日起こっていることがわかった。時期により母親の関わり方も異なり、大切なこと。	いつか母親になった時役立てたい。	
33		4歳、9か月の姪を思い浮かべ、共感できた。	信頼できるアタッチメントを形成するために活かしたい。	
34		胎児、乳児には何かを与えるだけでなく、その子自身が持っている能力をのばすような育て方をすることが大切。	将来、学んだことを少しでも生かせるような子育てをしていきたい。	
35	○		自分が親としての立場に立たされた時、「自分の使い方」の幅が広がったような気がした。溺愛することなく、責任を放棄することなく、自分の信念を持って子どもと接したいと思う。	
36	○	母乳を与えることについて、栄養、免疫を与えるだけでなく、精神的な面でも重要な役割を持っていること。	将来のわが子の発育のために活かしたい。	子どもの発達、親の役割に一層の興味を持てた。授業ではふれられていない幼児期についても少し手を伸ばして自分で勉強したほどだ。
37	○	乳児が大人にはできない音の聞き分けをすること。	乳児、幼児に対する働きかけは発達水準に合わせて行わなければならない、そして少しだけレベルの高い体験をさせることによって発達が導かれるということを活かして子どもの発達を促進していきたい。	
38		成長に愛情が大事	子どもを産んだ時。	
39		赤ちゃんの睡眠グラフ、授乳量から考えて、家族全体の協力が必要であること。	子どもを持った時、薬、お酒を控え、愛情を深める。	
40	○		カウンセリングに活かす。男性である私の発言に説得力があるようにしたい。	
41	○	胎生期の発達で、いつ性別が決まるか、薬の影響がいつ強いかなど。	自分に子どもができた時接し方に活かす。	
42		生まれた時に多くの能力をもっているが、成長につれて必要なもののみが残り、不必要な能力はなくなっていくこと。 大人の顔を見て笑っていても、感情があるわけではないこと。	母親になった時。 まわりに育児に悩んでいる人がいたら、手を差し伸べられるよう勉強したい。	
43		大人でも難しいサル顔の認識、外国語の発音の聞き分けが出来る	将来の人生の中で子どもを育てることがあれば、しっかりと愛	

		ていること。 成長につれて、生きていく環境に必要なものを残し、不必要なものを捨て、さらに新しいシナプスをつくっていくこと。	着を形成するとともに、原始反射など実際に試したい。	
44		生まれた時から生きていくための力が備わっている(原始反射、愛着) こと。	親になった時、接し方の一部に活かす。 バイトで親子のやり取りを観察してみたい。	
45	○	マザリーズの読み聞かせ実験で、内容と読み手によって反応が変わるという結果	親としての基本的な知識として活かしたい。	
46		赤ん坊がちゃんと親を認識していること。 大人よりも敏感な感覚を持っていること。	親になった時の接し方。	
47		何も出来ないと思っていた赤ちゃんが生きるための力もっているという命の不思議さ。	自分の子どもに愛情を持って接し、働きかけに反応する。 覚えていたら原始反射を試す。	
48		マターナル・ケアが発達に影響すること。 以前は、母子の関係が希薄になるだけだと思っていたが、発達に遅れが生じることがあること。	知り合いの子どもとの関わり方。 親になった時。	
49		子育ての大切さ 母と子の両方が満足していないと子どもはしっかり育たないこと。 乳児でもしっかりした意志もっていること。	子どもができた時。	
50	○	子どもを通して親も成長すること。	子どもを育てることになったら、学んだことを活かして子どもとよりよい関係になりたい。	
51	○	何も出来ないと思っていた赤ちゃんがたくさんができること。 赤ちゃんは可能性の塊。	自分で直に体験するかも知れない、そんな時。	
52	○	乳児は思っていたより、たくさんを学んだり、感じたりしていること。 乳児に対する親の対応が後の発育に大きく関わること。	将来子どもが出来た時生かしたい。	
53		思っていたより、まわりの環境からいろんなことを吸収していること。 早い段階で母親とそうでない人を区別していること。	自分や友人に子どもができた時、望ましい接し方ができる。	
54		子どもと多く接することの大切さ。 夫婦の関係も影響すること。	身近に子どもがいたら、よく話かけたい。	
55			自分に子どもができた時、どう向き合うかを考えさせられた。	
56		愛情をもって接することの大切さは知っていたが、情緒性にも	自分や友人が親になったとき。	

一般大学生に子どもの発達について講義することの意義

		問題を生じるとは思っていなかった。		
57		人間らしい、人の基本的な部分が反射としてあることに、驚きと言うより不思議を感じた。	人は人との関わりの中に生きてこそ人間らしく生き生きとされると感じた。 自分が子どもを持った時、注意していきたい。	
58	○		父親になった時。	
59		考えていたより、ずっと賢いこと。	将来子どもを産む時。	
60	○	赤ちゃんは大人が思っているより賢いこと。	これから心理学を学ぶ上で、自分が親になった時。	
61		泣くことしかできなくても、大人の言葉をちゃんと聴いていること。 会話できなくても、積極的にアプローチすることが大切なこと。	あまり子どもは得意ではないけれど、人事ではない。子どもは目に入れても痛くないと言うのが不安。一人前の人間に育て世に送り出せるようにしたい。	いつか結婚し出産を経験するであろう女性に生まれ、無知のままそれらを経験するよりも、大学生という子どもとも大人ともとれない時期に学習したことは、とても貴重だったと思う。喫煙の危険性や虐待の恐ろしさ、育児の大変さや両親の心境などを考えるよい機会になった。
62		すごい能力をもっていること。	子どもができた時に活かしたい、仕事もしたいので。	
63		乳児が人の表情を読み取る能力に驚いた。 無限の可能性を秘めていること。	親とのコミュニケーションだけでなく、他の子どもとの繋がりを大切に、子どもの能力を引き出したい。	
64		一部の大人より優れた能力をもっていて、それがだんだんなくなること。 人間の神秘的な部分。	友人にアドバイスしたい。 将来の自分に活かせると思った。	
65		母子関係が原因で後の発達に障害が生じること。 思っていたより乳児期は重要な時期であること。	同年代の友人や自分も親になる年代に近づいたので、後の発達に悪影響がないよう気をつけながら接したい。	
66		影響が具体的にわかった。	自分の子どもを持つ時。	
67		胎教や早期教育の意味がないこと。	独自の子育て論を展開したい。	
68			自分が子どもを産むとか考えられないけど、活かせたらいいなと思った。	今まで子どもは嫌いで、こういう発達心理学的な講義をとったことがなく、今回初めて学んで、少し興味ができた。自分がどのようにして育てられ、育ったのか知ることができ、すごく自分のためになったと思った。

約半数ずつの学生が「胎児、乳児が持っている能力について」もしくは「母子関係・家庭環境の大切さ」をあげている。男子学生、女子学生ほぼ同様の反応である。

主な記述内容は、「新生児が大人の耳よりも正

確に聞き分けられること」、「把握反射の力が強いこと」、「乳児が顔の識別をすること」、「成長につれて、生きていく環境に必要なものを残し、不必要なものを捨て、さらに新しいシナプスをつくっていくこと」や「親とのコミュニケーションの大

切さ」、「マザリーズが子どもとの距離を縮めるものだということ」、「器官形成期の大切さ」、「成長の時期により母親の関わり方も異なり、大切なこと」、「マターナル・ケアの欠如は、母子関係が希薄になるだけでなく、発達に遅れが生じることがあること」等々であった。

大部分の学生にとって、胎児、乳児の有能性についてはこれまで耳にする機会がほとんどなく、様々な能力を示す赤ん坊の例は印象的だったものと思われる。母子関係・家庭環境の大切さに関しては、力を入れて講義している内容であり、回答結果はほとんどの学生が理解したことを示すものと思われる。その他、2、3名ずつの学生は、「子どもの育て方」、「子育ての大変さについて」、また、「夫婦関係も多くの影響を与えることについて」等をあげていた。さらに、「子どもを通して親も成長すること」と回答した者もいた。「子どもに興味はあったが、知らないことの方が多くて驚いた」と書いた者もいた。

以下のことから、いずれの学生も印象的に受講したものと考えられる。

(3) 質問⑤に対する回答について

質問⑤に対する回答を、質問②に対する回答同様、表2に示す。

「将来子どもができた時あるいは親になった時に活かしたい」と57名の学生が自分自身の問題として回答している。

男子学生、女子学生で異なる回答がみられるのではと予想していたが、両者とも自分が親になった時の問題として考えていることがわかる。

「友達にアドバイスしたい」、「親戚の子どもにかかわるときに活かしたい」と答えた者も9名いた。「ボランティアをしているから」、「福祉の仕事に就きたいから」と書いた学生もいたが、子育て支援をする社会人の立場からの記述は「身近に子どもがいたら話しかけたい」「死ぬまでに子どもは身近に存在するからずっと活かせたらよいと思う」等のみであった。

(4) 自由記述から (下線は筆者によるものである。)

その他、自由記述欄に書かれていた文章を引用

してみよう。

「生きるための力をもっている人間の赤ちゃんのすごさを知った。でもさらなる成長(精神的発達)には母親からの働きかけも必要不可欠であることを学び、改めて育児の奥深さを感じた。」「子どもの発達、親の役割に一層の興味が持てた。授業ではふれられていない幼児期についても少し手を伸ばして自分で勉強したほどだ。」等は、筆者の授業の目的が達せられたことを示す記述であり、下線部を引いた学生のように1人でも多くの学生のさらなる学習に結びついてほしいものである。

「親が愛情いっぱい育ててくれたから、今、自分がこうしていられることがわかった。」「母にも子育てのやり方や、どのようにして私を育ててくれたのかも聞いてみようと思いました。大人になって、親を尊敬するというのは、こういうことかと思った。」からは、講義を受講する中で、育ててくれた人に対する感謝の念が現れたことがわかる。親の思いへの共感とも言えるものであろうこれらの気持ちについては、授業の中では解説していないにもかかわらず、受講生の心の中に自然発生的に生まれた感情である。

そして、「今まで子どもは嫌いで、こういう発達心理学的な講義をとったことがなく、今回初めて学んで、少し興味がでてきた。自分がどのようにして育てられ、育ったのか知ることができ、すごく自分のためになったと思った。」に記載されているよう、青年たちはこのような内的作業を通して、自分を知り、アイデンティティを確立していくわけで、その意味でも本講義の意義が認められるのではないだろうか。

「いつか結婚し出産を経験するであろう女性に生まれ、無知のままそれらを経験するよりも、大学生という子どもとも大人ともとれない時期に学習したことは、とても貴重だったと思う。喫煙の危険性や虐待の恐ろしさ、育児の大変さや両親の心境などを考えるよい機会になった。」「胎児期、乳児期という早い時期からの親子の関わり方がその先の発達に大きな影響を持つことを学んだが、これは意外なほど知られていないことだと感じた。子育てをする母親のみならず、親子のかかわりの重要性を正しく理解し、子どもに愛情をもって接し、子どもの健全な発達を促すことが何より

も大切なのではないだろうか。」等の記述は、受講生達は講義を受けて子どもを育むことの大切さに気づいたが、その大切さが多くの人に知られていないことを指摘している。

「私は4年生で、卒業までに何か将来的に役に立つ勉強ができたらと思って受講したが、正解だった。心理学としてではなく、子育てという人間の基本的な営みを考えると、大人になる前に、親になる前に誰しも受けておくべきではないかなと思った。」との記述は、感受性豊かな感じやすい時期に子どもの発達について、また家庭の大切さについて学習することの意義について学生自らの気づきがあったことを示していると言える。

Ⅳ おわりに

「はじめに」で述べたよう、1980年代には育児不安を抱えた母親が問題になり、子育てに社会の手が差し伸べられる必要性が指摘されていたが、その機運は高まらず、2003（平成15）年の次世代育成支援対策法を契機に、ようやく社会全体で子育てを考えていこうとする機運が出てきたといえる。世の中のすべての人が子育てに価値を認め、さまざまな人との協働で子育てが行われるのが、本来の「社会による子育て」であり、そのような社会になることが望まれる。そのためには、子育てが価値あるものだとの認識をすべての人々が持ち、子どもたちの心身が健やかに生まれ育つよう支援できる力を持つ必要があるが、子育ての伝承が失せつつある今日では、それを学習する必要があると考えられる。

今回のアンケートの対象となった学生たちの記述は、その機会が与えられれば、子育ての価値への認識を持つことができるという可能性を示すものであった。

彼らは、胎児、乳幼児の能力に驚き、自分の幼児期と重ね合わせて自己を改めて見つめ直し、やがて子どもを育てるかもしれない自分に思いを馳せている。育てる立場に立った時、今、学生として学んだことを活かせるだろうと考えている。さらには親の思いにも共感することを示している。子どもの発達について学ぶことが、将来親になってもならなくても、社会人として必要な、次世代を育成するという能力の基礎を育成することに結

びつく可能性を示唆していると考えられる。

金田は、「育てられている時代に育てることを学ぶ」ことは、子ども時代を豊かにするとともに、やがて主権者として不可欠な力量の一つである〈次世代の育成に責任を持つ〉という能力の基礎を育成することにつながる。」と述べている。ここに、「育てられている時代に育てることを学ぶ」⁽⁹⁾ことの意義があると言えよう。

日本経済団体連合会は、「少子化対策の重要性に早くから気づき政策転換を図った国々においては、積極的な財政投入に加え、出産・子育てのすばらしさを訴えるポジティブキャンペーンを展開するなどして成果をあげている。」として、2009年2月に「少子化対策についての提言―国の最重要課題として位置づけ、財源の重点的な投入を求める―」との題目の提言⁽¹⁰⁾を行っている。

その中で、「古来、わが国では子どもをかけがえないものとして、親が子を慈しみ、将来の夢と希望を語りかけ育ててきた。また子どもを取り巻く社会も、子育てをする親を支え、共に子育てに携わるとともに、子育ての素晴らしさを伝えてきた。安心して子どもを生み育てることのできる社会の実現に向けて、前述の社会インフラの整備や企業における多様な働き方の推進とともに、子どもはわが国の将来を支える〈社会の宝〉であるとの認識のもと、社会全体で子育てを温かく見守り、支えていく雰囲気醸成していくことも重要である。また、子育ての意義を、学校教育を通じて中高生のころから伝え、若者が子育てを楽しいこと、素晴らしいことと思えるように導くことも重要と言える。わが国の誇りであった子を慈しみ育てる文化を取り戻すことに国民一人ひとりが共感するよう、広く社会に訴えていく必要がある。」と述べている。

提言の言葉にも述べられているように、かつては子育てに関する当たり前の営みとして自然に伝えられていた事柄も、今日では改めて、殊更に伝えなければならなくなっているのである。子どもの大切さ、子育ての大切さ、親子のかかわりの大切さ等々を、大人だけでなく、大人になる前にも、どこかできちんと伝え、彼らが大人になった時、次の世代の子どもたちの健やかな成長を支援できる力をつけておく必要があると考えられる。

以上のことから、筆者が行っているような、一般大学生に対して、胎生期に始まる人間の発達を講義し、たとえ僅かの数の学生であっても、彼らの感性を揺さぶることの意義があると考ええる。

【注】

- (1)厚生統計協会(編) 2009 国民衛生の動向 厚生指標増刊
- (2)朝日新聞 2009年9月21日朝刊「女性の4人に1人65歳以上」
- (3)前掲書(1)
- (4)服部祥子・原田正文 1991 乳幼児の心身発達と環境—大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会
- (5)文部科学省中央教育審議会 2005 答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」
- (6)無藤隆・民秋言 2008 ここが変わった NEW 幼稚園教育要領・保育所保育指針ガイドブック フレーベル館
- (7)前掲書(6)
- (8)拙稿 2006 子どもの現状と次世代育成について 名古屋柳城短期大学研究紀要 第28号 pp43-59
- (9)金田利子(編著) 2003 育てられている時代に育てることを学ぶ 新読書社
- (10)日本経済団体連合会 2009 「少子化対策についての提言—国の最重要課題として位置づけ、財源の重点的な投入を求める—」

The Significance of Giving a Lecture on Child Development to University Students

Narita, Tomoko*

幼児教育の振興は今や世界的な潮流であり、わが国においても他の国と同様、幼児期への関心が高まっている。しかし、現実の子どもたちに目を転じると、「子どもは病んでいる」という言葉さえ聞かれ、基本的な生活習慣の欠如、コミュニケーション能力の不足などが指摘され、家庭の教育力の低下、地域社会の教育力の低下が問題とされている。社会全体が子どもを尊重し、子育てに意義を認められる世の中であるために、何が必要であるのかを学生のアンケート調査をもとに探った。一般大学生に胎生期・乳児期の生命の不思議を教授することが子どもへの関心を高め、彼ら自身の人間形成にも寄与することが示唆された。育てられている時代に育てることを学ぶ意義について考察した。

キーワード：次世代育成，子どもへの関心，子育ての意義，青年期における学習